広い視野と柔軟な思考力、物事をいろいろな角度から捉える複眼的な洞察力が不可欠(朝倉)

朝倉　看護学は、米国において1960年代頃から科学としての道を本格的に歩み始めた新しい学問です。日本においては1990年代後半になってやっと大学院における教育システムが整い、看護学博士号取得者を輩出するようになりました。私が学んだ時期は、いわゆる看護学の黎明期でもあったわけですね。ですから学部生の折は、実践と科学のはざまでかなり混乱したことを覚えています。どちらかといえば臨床経験が重視され、看護学を究めたければ看護師として“現場”を踏むべきと推奨されていました。私も卒業後の4年間は看護師として働きました。確かに臨床の現場は、非常にダイナミックな事象・変化が日々繰り広げられる場所です。しかし多忙を極めるなかで、ひとつの現象や問題を深く思索する余裕もなく、またそれを分析したり理論に展開したりする力も持ち合わせていないことに気づきました。大学院に進学することは、私にとっての必然と思えました。しかし他方では、そろそろ結婚して家庭に入るべきと意見されることもあったのです。ここでもジェンダーとの闘いがあったことを申し上げておかなくてはなりませんね。結局は研究者としての道を選びました。大学院での学びはとても面白く、渇いた砂がどんどん水を吸い込むように、4年間のブランクを埋めていったのです。経験に「科学の視点」が与えられた瞬間でした。

丸山　確かに看護学を修めるには、最低3年間の臨床経験を積むべきという通念がありますね。なるほど現場では得難い体験ができるのですが、「鉄は熱いうちに打て」の諺の通り、思考し探究する能力は、頭脳・精神ともに柔軟で吸収力のある若いうちに鍛えるべきというのが、私の経験を通じた感懐です。

朝倉　そうですね。フィールド目線というのは欠くべからざるものです。ただ世界に問う研究成果をあげるという観点からは、やはり若い時から専心できる時間が必要になってくるでしょう。看護学は、生物学、医学、社会学、心理学、哲学などにもまたがる学際的領域です。ひとつの理論に当てはめて導いた結果でも、別の理論からみると違う分析が成立します。硬直した視点からではなく、多面的・多角的視野でとらえることが肝要であるということを学生さんにはいつも伝えています。

日々を真摯に着実に積み重ねる姿が、誰かのロールモデルになるのだとしたら、それは無上の喜び(丸山)

丸山　私たちの研究室が取り組む「看護アセスメント学」は、生理学的手法から科学的検証、評価、理論的な裏づけを与えようとする分野ですが、百人百様という言葉が示すとおり、概念、理論、定義、公式にすべてが例外なく当てはまるわけではありません。科学的にはなりえない部分、一筋縄ではいかないところが、研究者をとらえて離さない魅力なのかもしれません。わからないものはわからないと言える勇気と謙虚さも、あるいは研究者に必要とされる資質なのかもしれません。学生さんには、「誰かの役に立ちたい」という青雲の志をいつまでも抱き続けてほしいと願っています。

朝倉　私の職業人としてのミッションは、「看護師の社会的地位を向上させる」ということに尽きます。最近では男性看護師の姿も見かけるようになりましたが、全国の看護職約130万人のうち、95%が女性です。大卒看護職が増えつつあるというものの、全体的に見れば専門職としての自尊意識は高いとはいえません。離職率も高いですし、子育てを終えたあとに復職される方も多くありません。もちろん職業観は種々相を描くものですが、看護師が自身のキャリアを積みつつ、イキイキと働ける環境づくり、社会から正当で適切な評価を得られ、報酬にも反映されるような仕組みづくりのために尽力していけたらと考えています。

丸山　私たちの共通点は「単身赴任者」であるということなんですよね。二人とも住まいは東京にあって、それぞれの配偶者が住んでいます。

朝倉　研究者／教員の間では決して珍しいことではないのですが、単身赴任のあり方が逆で、驚かれることも多いですね。

丸山　女性の働き方としてこういう形もあるのだということが、ごく自然に受け入れられるようになって初めて、女性が働きやすい社会であるといえるのではないでしょうか。

朝倉　そう考えると、私たちの使命と責務に、後進のための“露払い”をするということもありますね。どんな歩みでもたゆまず進めていくことで、道も拓けてくるとのではないでしょうか。

丸山　そう思います。日々を真摯に着実に重ねる姿が、誰かにとってのロールモデルになるのだとしたら、これほどうれしいことはないですね。お互いにがんばりましょう。

［朝倉研究室・研究内容紹介］

2010年4月に新設された「看護教育・管理学分野」が取り組むのは、看護職の生涯教育や人材開発、人材管理に関連する研究。主なテーマ・課題に「看護職の専門職的自律性、自律的な臨床判断、反省的思考に関する研究」「看護職の国際移動に関する研究」「看護現象のジェンダー分析に関する研究」「看護職のワーク・ライフ・バランス、ストレス、職業継続等に関する研究」などがあり、これらの考察と探究を通じて、看護職の社会的地位の向上、あるいは看護職の専門職性を高めることによるケアの質向上、さらには看護職特有のキャリア支援やストレスマネジメント等に関する具体的な成果を上げ、社会的に還元していくことを目指しています。

1991年3月日本赤十字看護大学看護学部看護学科卒業、同4月日本赤十字医療センター勤務(看護師)、1997年3月日本赤十字看護大学大学院看護学研究科修士課程修了、2000年3月同大大学院看護学研究科博士後期課程単位取得済満期退学、同6月厚生省健康政策局看護課保健師係長、2001年3月博士(看護学)学位取得、2002年4月新潟県立看護大学看護学部助教授、2009年4月より現職。専門は、理論看護学、看護教育学、看護管理学、ジェンダー研究。2006年6月日本保健医療行動科学会中川記念奨励賞受賞。